

子どもの頃の夜尿が、 その後の人生に与える影響についての新しい知見

本資料は、フェリング社が英語で発表しましたプレスリリースを日本語に翻訳し再編成したものです。この資料の内容および解釈につきましては原本である英文が優先します。詳細につきましては、フェリング社のウェブサイト (<http://www.ferring.com/en/media/press-releases/2011/>) に掲載されておりますオリジナルのプレスリリースをご参照ください。

2011年9月2日 英国・グラスゴー発

第41回年次国際禁制学会(International Continence Society, ICS 2011)にて、小児期の夜尿が、将来の夜間頻尿(臨床的にいえば、夜に1回以上トイレに行くことになる症状)、また成人期の夜尿が起こる可能性の指標になるのではという、新しいデータの発表¹がありました。

この新しい調査は、夜間頻尿と小児期の夜尿歴の間に何か関連性がないかを調べるために、ドイツの調査グループによって実施されたものです。

1,201人の成人からのアンケート回答が得られ、内訳は、現在夜間頻尿である群(53.4%)、成人期になっても夜尿がある群(18.1%)、とコントロール群(28.5%)です。

コントロール群と比較すると、小児期に夜尿があることは、成人期になっても夜尿が起こることへの強い指標になる($p < 0.0001$; オッズ比 9.841)ことが示唆されました。また小児期の夜尿は、年配になった時に夜間頻尿になる指標にもなることが示唆されました($p = 0.0747$; オッズ比 1.351)。

これらの結果は、小児期の夜尿に対する治療の必要性を喚起し、治療をすれば、ただ単に成人期になっても夜尿が起こる患者数を減らすだけでなく、年配になって夜間頻尿になる人数も減らすことになることを意味しています。

夜尿というのは、子どもたちの一般的な健康と生活の質に悪影響を及ぼし、もし治療しないで放置されれば、大人になっても治らない状態が続くこともあります。何も治療しないでおくと、少なくとも10人にひとりの子どもの一生ずっと夜尿をするといわれています²。確かに今回のこの新しい結果でも、約18%の方が大人になっても夜尿をしていることが示唆されました¹。

小児期の夜尿を治療しないで放置することは、小児の精神的健康にも負の影響を与え、社会性発育にも問題を起すことでしょう³。

欧州全体で、500万人以上の子どもに夜尿が起こっていると推定されています⁴。

英国では、ぜんそくの次に多い小児の慢性疾患であり、5～16歳の間で50万人以上が罹患しています⁵。よって、このデータは、大人になってまでも夜尿が続いたり、夜間頻尿になるとの状況から、際立つ警告をだしていると考えられます。

これらの発見の重要性は、今年のICSで発表された、さらなる調査結果によって裏付けされています。ボストン地域共同体での健康調査(The Boston Area Community Health Survey)で、5,503人の大人に、夜間頻尿の生活の質に対する影響を調べたものです⁶。

この調査では、夜間頻尿が、高血圧、糖尿病、関節炎などの他の慢性疾患と匹敵する影響度を持っていることが明らかになりました。また、夜間の頻回トイレに行くことが、特に若めの男女で、うつ状態になる可能性を顕著に高めていることが示されました。

“多くの親にとって、自分の子どもたちが夏休みを終え学校に戻る準備をしている時、夜尿は多々気になることである。本当に重要で覚えておかなければいけない点は、ほとんどのケースで夜尿は治療することができるということ、また、この夜尿は子どもに非があるわけではないということです。夜尿を抱える自分の子どもを助け、また将来起こるであろう問題点を防ぐためには、まず子どもの掛かりつけ医にこの問題について相談することである。” ドイツ夜尿症学会のダニエラ・マーシャル-キーレル医師(Dr. Daniela Marschall-Kehrel, German Enuresis Academy)は言います。“そしてこのデータが示唆するように、子どもの一般的にいう健康状態のためだけでなく、将来の健康問題の可能性を下げる視点からも、子どもの夜尿の治療を求めることは非常に重要である。”

夜尿とは、5歳より上の子どもで、中枢性神経系に何の問題がないのに、睡眠中の不随意的な尿失禁が見られることをいいます⁷。普遍的で、世界中どこでも似た罹患率の疾病です⁷。

夜尿は、女の子より男の子の方に多く、もし治療されていないと、7歳児の16%に見られます⁷。思い違いがあるのは、子どもたちが育つにつれ自然に夜尿はなくなっていくと思われているが、一方実際は大人になっても夜尿があるデータがあることです。香港での調査だと、40歳の2.5%は未だ夜尿症を患っており、そのうち50%より多くの方は週に3回以上の夜尿をしているとのこと⁸。今回の調査データは、夜尿治療の重要性を示すさらなる根拠となるでしょう¹。

多くの親は、一般的に見られる症状でありながら、夜尿に対する認識と理解がありません。

ほぼ半分の親はその問題を見逃し、また約3分の1の親は、自分の子どもが週に5回以上も夜尿を起こすまで、何もしていないでいます⁹。さらに、80%の親は、子どもの夜尿の原因がストレスと心配事であるとの間違った考えを信じています⁹。

現実には、大部分の夜尿は、効果的に、そして二度と起こらないように治療することができる疾病なのです。

参考文献:

1. Nykturie. Are today's nocturia patients the former bedwetters? An internet based national epidemiological survey, ICS 2011, Abstract (ABSTRACT NUMBER 241)
2. Hjälmås K. Pathophysiology and impact of nocturnal enuresis. Acta Paediatr. 1997 Sep;86(9):919-22.
3. Schulpen TW. The burden of nocturnal enuresis. Acta Paediatr. 1997 Sep;86(9):981-4.
4. <http://www.ferring.com/en/therapeutic/urology/About+Bedwetting/>. Date Accessed 18th August 2011
5. ERIC 2001. A compilation from the Europa World Year Book 1998 using the statistics from surveys in Great Britain, Holland, new Zealand and Ireland (Butler 1998)

6. ICS Abstract 543. Nocturia and Quality of Life. Results from the Boston Area Community Health (BACH) Survey. September 2011.
7. Butler et al. Alspac, 2005, *BJU*; 96: 404-410
8. Yeung CK, Sreedhar B, Sihoe JD, Sit FK, Lau J. Differences in characteristics of nocturnal enuresis between children and adolescents: a critical appraisal from a large epidemiological study. *BJU Int* 2006; 97(5):1069-1073.
9. BRMB International Survey, 2002